

その現場 に学ぶ!

「大原接骨院」に学ぶ アスリート時代の経験から、 ケガを治せる治療家へ



バラエティに富むスタッフ。前列中央、ブルーのユニフォームが大原院長。

— 大原先生はプロ・テニスプレイヤーとして国際大会でも活躍されたアスリートと伺いましたが、治療家に転進された経緯をお話いただけますか？
(大原院長)「29歳の時に引退したのですが、選手生活の後半はケガに苦しめられました。国際大会に出場していたといっても専任のトレーナーがいたわけではないので、どうしても無理を押し付けてハードトレーニングして、逆にケガをしたりするんです。選手のコンディションをコントロールしてくれる存在の必要性を肌で感じてきましたから、引退後はコーチの傍ら、治療家になって選手をサポートしたいと思ったんです。」

— なるほど、選手時代の辛い経験が原点というわけですね。
(大原院長)「そうですね。ところが、この業界に飛び込んでみると違和感を覚えることが多かったですね。それは患者さんを“治す”のではなく、接骨院に“通わせる”ことを重視する向きがあるところなんです。僕は自身の苦しんだ経験から、“通わせる”ということは接骨院側の視点であって、患者さんの



玄関正面に飾られたライオンたちは、患者さんからのプレゼント。

目線には立ってないと思うんですよ。患者さんはできることなら今すぐにも治してほしいと思っているはずですね。だから僕は治せる技術の習得に必死でした。患者さんに早く治ってもらって、試合に出たいとか、あるいは買いたいものに行きたいとかでもいいので、患者さんの望みを実現させてあげたいという想いは常に持っていますね。」

— “治す”ということが「大原接骨院」のコンセプトになっているのですか。
(大原院長)「それを目指しています。当院は駅前商店街のなかにありますから、人通りは多いですが競合も多いんです。患者さんに選ばれるために“治す”ということが重要だと考えています。」

— “治す”ということが差別化ポイントになれば強いんですよね。テレビにもとりあげられて話題になったそうですね。

(大原院長)「とんでもない!一生勉強ですよ。より多くの患者さんを治療しようとするれば、当然一人では限界がありますから、“治す”ことはスタッフ全員で追求すべき課題です。しかしながら、例えば技術にばらつきが出たり、足並みが揃わないこともあるわけです。僕が至らないのですが、僕としては「大原接骨院」をスタッフにとって“夢を叶える場”にしたいと思っています。患者さんを“治す”ことに果敢にチャレンジして、治療家として大きな成功を掴んでほしいですね。」



待合と施術スペースが一体となった院内奥は矯正スペースが設けてある。背骨の歪みを整え、痛みをとる手技が施される。



テレビにもとりあげられた「大原接骨院」。友人が開業祝いに描いたというライオンは大原先生のトレードマークになっている。

【大原接骨院】
◎ 神奈川県大和市南林間1-10-19
◎ 046-273-3307
◎ 平日 9:00~12:30、15:30~19:30
土曜 9:00~12:30、15:30~18:00
日曜 9:00~12:00

東京副都心まで約1時間というベッドタウンの神奈川県大和市。「大原接骨院」は南林間駅に近い商店街、スーパーマーケットに隣接する好立地だ。しかし競合の多いこの地域では、立地条件だけでは勝てない。元プロ・テニスプレイヤーである大原先生が追求した戦略は、自らの選手時代に痛感したサポートの必要性から、治すという王道であった。治す、こそ自体は治療家として存在理由そのものように思われるが、治すことが戦略に成り得ると言うことが我々の業界の根本的な問題なのかもしれない。院長の大原先生に聞いた。